



写真-1 田君川の川面を埋めるバイカモの白い花（平成27年5月撮影）

### ■ 白く可憐なバイカモ（梅花藻）の花が川面一面に

写真-1 は、岸田川の左支川・田君川（たきみがわ）の中流、新温泉町栃谷（とちだに）にある「田君川バイカモ公園」でバイカモの花を撮ったものです。花は少し早いかな、と思いつつ5月中頃に行ってみると、幅約10mの川面にバイカモ<sup>※1</sup>（梅花藻）の白い可憐な花がまるで絨毯を敷きつめたように咲いていました。

花の大きさは1.5cm程度、数えきれないほどの白い五弁の花（花弁の根元は黄色）の集合体が、上の写真のように水の流れによって不思議な模様を描いています。水中に広がる沈水葉は柔らかな緑色で、白い花とのコントラストが鮮やかです。

※1 **バイカモ（梅花藻）**：日本固有の種で、キンボウゲ科キンボウゲ属の多年草の水草。和名は、花が梅花に似ているのでこの名がある。冷涼で流れのある清流中に生育し、初夏から初秋にかけて白い花をつける。静水では育たず、水槽での生育も困難。山菜として食用にもなる。北海道から本州にかけて分布する。平地から山地までの清流の水中に生育する。冷水を好むため、北日本では水路や河川などに広く分布するが、西日本などでは上流や湧き水のある地域に分布域が限られる。花は、梅雨の頃を中心に、5月から10月にかけて5ヶ月余りにわたって楽しめる。花は葉腋から伸びた長さ3～5cmの花茎の先につき、白色の花弁を5枚つけた花が水上で開花する。清流でなければ育たないため、バイカモはきれいな川の指標になる。沈水性<sup>※2</sup>の植物で、葉は濃緑色で分裂し、流れに沿って1mほどに伸びる。葉身は細かく裂け糸状の裂片となり、水中で束になって生えている。常緑性で、水中に茎を匍匐させ節から不定根を出して水底に定着する。茎の長さは2m近くになることもある。生育適温は15℃で、25℃を超えると生育できなくなる。



写真-2 バイカモの花（「田君川バイカモ公園」にて）

※2 沈水性：根元が水中に浸っているだけのものを湿生植物、根が完全に水面下にあり、茎や葉が水中から水面上に伸びるものを抽水性植物、葉が水面に浮かんで、その表面が空気に触れているものを浮葉性植物、植物体が完全に水中にあるものを沈水性植物と言う。沈水性植物であっても、花は空中で咲かせるものが多い。流れが速いと水中花になる。

## ■ 大群落を形成していた田君川のバイカモ

田君川のバイカモは、京都大学理学部講師の村田源（げん）先生が昭和 61（1986）年 5 月 3 日に流域の植物調査で現地を歩いていて谷橋付近で見つけ、「河口から約 4km、標高約 10m という低地で、延々 2km（今は 200~300m）にわたって大群落を形成している例は他になく、学術的にも極めて貴重。」と評価されたそうです。

バイカモの分布地では、年間を通じて豊富な自然湧水があり、そのため 3 月から 8 月の水温は、8℃~18.6℃で変動しており、季節変動幅が比較的小さく、夏期の最高水温時においても 20℃以下だそうです。バイカモは清流の指標植物とされており、このようなバイカモの大群落が存在しているということは、人と自然が調和した生活環境が守られ、その結果、きわめて良好な自然環境が維持されている証と考えられます。



写真-3 川面を覆うバイカモの花（「田君川バイカモ公園」にて）

バイカモの大群落を保護するには、天然記念物に指定するよりも優れた水環境を守ることが大事と村田先生は指摘されています。とはいうものの、天然記念物に指定することで、捕獲、採取、開発などを規制することができ、減少や衰退がみられる場合は回復に向けた対策を採ることができるので、状況に応じてではありますが指定もありだと思います。

なお、バイカモは、環境省の RDB で絶滅危惧 I B 類（近い将来における絶滅の危険性が高い種）に評価されており、兵庫県版 RDB では B ランク（改訂・日本版 RDB の絶滅危惧 II 類に相当。兵庫県内において絶滅の危険が増大している種など、極力生息環境、自生地などの保全が必要な種）とされています。

## ■ バイカモ群落の保護活動

田君川では、すでに 30~40 年前にはバイカモが群生していて、子供たちに「金魚草」の名で親しまれていました。しかし、いつの頃からかツルヨシ※3 が繁茂し、バイカモの生育を阻害するようになりました。

そこで、兵庫県では平成 8（1996）年度から河川環境整備事業によりバイカモの良好な生育環境の創出に取り組むこととします。平成 12（2000）年度にはツルヨシを除去し河床を整理するとともに、湧水時でも一定の水深を確保できるよう 30m 間隔で少し大きめの石を並べて堰を設けました（写真-5-10）。併せて、堤防には階段を設けて訪れた人々が近くでバイカモを観察できるようにしています（写真-5-6）。

ツルヨシが除去されたのをきっかけに、田君地区住民が「田君川バイカモ保存会」を発足させ、絶滅寸前だったバイカモの保護活動がスタートしました。保存会が「ひょうごアドプト」に登録し、バイカモの生育を阻むツルヨシや外来植物の駆除を行うなどバイカモの生育環境の向上が図られてきました。その結果、花期になると川面いっぱいバイカモの白い花が見られるようになったことから、平成 16（2004）年 6 月に第 1 回「バイカモ祭り」が開催されました。以後毎年 6 月頃に「バイカモ祭り」が開かれています。



写真-4 ひょうごアドプト看板

ただ、増水するとバイカモの株が流されてしまうため、その都度、近くの小川からバイカモの苗を持ってきて、河床に根を差し込み、流されないように石を置いて固定する、といった地道な作業をしなければなりません。平成 25（2013）年 9 月には、増水により株の大半が流れ、土砂が堆積して生育環境も大きなダメージを受けました。県が堆積土砂の除去を行い、保存会のメンバーらが苗を移植しましたが、春先の湧水の影響で水位が低下し糸状藻類が発

生したため十分に育たず、平成 26 (2014) 年 6 月に予定していた第 7 回の「バイカモ祭り」はやむなく中止となったそうです。

今年 (平成 27 年) は 6 月 7 日 (日) に第 7 回「バイカモ祭り」が開催される予定です。このまま大雨さえ降らなければ川面一面に広がるバイカモの白い可憐な花が、訪れる人を楽しませてくれそうです。写真-1 は、祭り開催日の 20 日ほど前に撮影したものです。



写真-5 田君川バイカモ公園の状況



写真-6 田君川バイカモ公園

※3 ツルヨシ：イネ科ヨシ属の単子葉植物である。ヨシに近い植物で匍匐茎が地上を長く走る特徴がある。河川の上流域を中心に生育する。別名ジシバリで、これは匍匐茎が這う様子を縄で地面を縛る、という風に見立てたものであるが、この名を持つ植物はキク科などにもあるのでややこしい。背丈は最大で 3m に達するが、1.5~2m 程度のことが多く、50cm 位で穂を出すこともある。

河川においては川原を安定させる植物として重要であり、水質浄化の働きも期待されるが、生育環境の幅が広く、また成長も早いいため、その繁殖に手を焼く場合がある。素早く広がる上に、茎と根を深く水底の内部に下ろすので、刈っただけでは駆除できず、しかも引き抜くのも困難であり、あっという間に背丈より高いツルヨシの群落に覆われることがある。

### ■ モノローグ

水面を埋め尽くすほどに広がるバイカモの花、水面に近づいてみると、数えきれないほどの小さくて白い可憐な花が林立している様は見事と言うほかなく、観光客からは感嘆の声が聞こえてきます。

流れの影響で、写真-1 および写真-7~10 のように小さな花の集団が不思議な模様を描いてくれます。

しかし、川ですから年に数回の増水は避けられず、株が流されるたびに苗を移植するのは大変な作業です。熱心に保護活動に取り組んでおられる保存会の方々に只々敬服！！

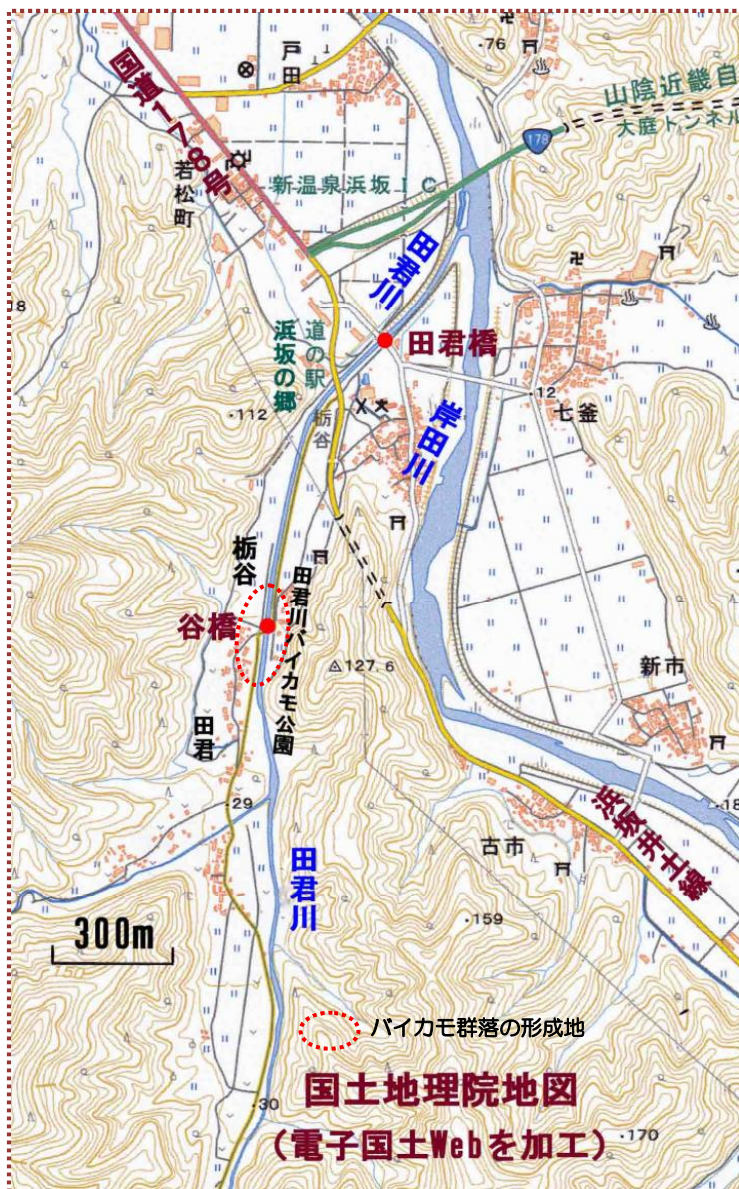


図-1 「田君川バイカモ公園」周辺の地図



写真-7 バイカモによる花模様その1



写真-8 バイカモによる花模様その2



写真-9 バイカモによる花模様その3



写真-10 バイカモによる花模様その4

### ニホンカワトンボ

カワトンボ属は、少し前までニシカワトンボ、ヒガシカワトンボ、オオカワトンボの3分類群に分けられていた。しかし、最近のDNAを使った系統学的研究によって、ヒガシカワトンボとオオカワトンボが同種として扱われ、ニシカワトンボがカワトンボとして整理された。さらにその後、日本蜻蛉学会の標準和名検討委員会においてこれらの和名が改められ、オオカワトンボをニホンカワトンボ、カワトンボをアサヒナカワトンボと称するようになった。右の写真は、田君川水際のアザミの葉に止まって休憩中のニホンカワトンボ。



写真-11 ニホンカワトンボ（「田君川バイカモ公園」にて）

### 【参考資料】

- 1 『田君川バイカモ公園』パンフレット 田君川バイカモ保存会・新温泉町役場商工観光課
- 2 『栃谷村の歴史散歩』 栃谷村編 平成 16 年 5 月
- 3 『デジタルトンボ図鑑～ニホンカワトンボ』 神戸のトンボ HP 令和 6 年 12 月更新  
<https://odonata.jp/O3imago/Calopterygidae/Mnais/costalis/index.html>
- 4 『バイカモ、ツルヨシ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 27 (2011) 年 6 月 『ひょうご水百景』 No.49  
改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.49-1